東方忘人記

超絶暇人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方忘人記

【Ｎコード】
Ｎ２６８３Ｚ

【作者名】
超絶暇人

【あらすじ】
いつも通りの朝、いつも通りの家、いつも通りの日常。
そんな日常から一転、少年は忘れられた…
家族、友達、身の周りみんなも…
彼の存在を忘れた…
忘却された影響で幻想入りした少年。

突然現れた　八雲　紫から事情を聞かされ…

彼は心に深過ぎる傷を負った…

彼はその心と共に、幻想郷を生きていく。

これは、そんな彼の…

‘‘忘れられし者’’　としての物語…

東方キャラ崩壊＆駄文注意です。

無理な人は戻る事をお勧めします。

たまにコメディ有り…

1話　忘れられた少年（前書き）

はいどうも！
超絶暇人です！

シリアスな新小説書いちゃいました。

こんなの書くなんて、暇なんですかね？僕。

それは良いとして、楽しんでください！

ではどうぞ。

1話　忘れられた少年

俺は…

俺の名は…

鳴神　優翔…

俺は……

・・・

優翔「ん～…眠い…」

改めまして、
俺は鳴神（なるかみ）　優翔（ゆうと）。

何処にでも居る普通の中学3年生だ。
歳は１５歳。
今日も眠い朝から始まった。

優翔「ふぁ～…寝たい…」

いや、本気で寝たい…
恐らく3時間しか寝てない…

理由はネトゲだ。
どうしても倒したいボスが居たから諦めきれず…
でもちゃんと倒した。
強かった〜…

で　この結果だ…
非常に眠い…
今日が休みならば寝れんのに…
そうもいかないのは良く知っている。

優翔「しゃあない…」

俺は嫌々ベッドから降りた。

優翔「はぁぁ〜…」

俺は時計を見た。
指していた時間は…

8時だ…

優翔「マジか…」

俺は急いで着替えて部屋を出て、家から跳び出した。

えっと、省略しまして…

今は家…

優翔「進路だとよ…　そんな事言っても、俺の成績じゃあなぁ…」

どうにもならない…

俺は無駄な事を考えるより、行動を起こすのが先なタイプ。

実際、考えてても始まらない。

遊び行こう、遊び。

で、今は外出中…

友達はそれなりに居るが、みんな塾で勉強していて、塾に行ってない奴もあまり遊ばない。

何だよ…俺だけ自由モード？

何かの不公平を感じた俺は家に帰る事にした。

優翔「帰ろ帰ろ…」

そんな時だった…

俺の視界が歪んだ。

何故か周りは形を変え、昔の時代劇に出て来そうな光景になった。

形を変えた世界を見た俺は…
気絶した。

・・・

優翔「……ここは…」

俺は目を覚ました。
光景は変わらぬまま…

どうやら幻覚じゃないようだ。
じゃあ、一体ここは何処なんだ？

？「ここは幻想郷。」

優翔「…うぅわあああ！！！」

後ろから声がしたから振り向くと、そこには日傘をさした女性が居た。
いきなり現れたから驚いた。

とても不思議な女性だ。
まるで全てを知っているかのよう…

優翔「だ、だ…誰？」

？「私は八雲（やくも）　紫（ゆかり）。」

「幻想郷へようこそ。」

優翔「げ…幻想郷？何だよそれ？此処は…」

紫「〇〇〇市、〇〇の〇丁目。かしら？」

優翔「何で…俺ん家の住所を…」

紫「全て知っているわ。あなたの事も…」

優翔「此処は何処なんだ？教えてくれ！」

紫「此処は幻想郷。
幻想の者達が住まう世界。」

優翔「じゃあ何で俺は此処に居るんだ！」

紫「・・・」

突如女性は暗い顔で黙り込んだ。
何か隠しているのか？

優翔「教えてくれ！一体何で？」

すると女性は口を開き、こう言った。

紫「あなたは…」

「忘れられたのよ…」

優翔「わ…忘れられた…だと？」

紫「・・・」

優翔「じょ、冗談言うなよ！みんなが俺を忘れるわけ…」

紫「私もそう思いたかった！…残念だけど、あなたは…」

「存在を忘れられたのよ…」

何を言っているかサッパリわからない。

忘れる？そんな事あるもんか！

大体どうやったら俺の存在がみんなの記憶から抜けるんだよ？

紫「あなたが外に出かけた後の事よ…」

「あなたの両親は突然あなたの名前を忘れたわ。父親の方が名前を言ったけど、母親が忘れていて、ついには父親も忘れた。」

優翔「そう言えば、この頃物忘れが酷かったのわ…」

紫「友達は恐らく存在の欠片さえ憶えてない筈よ。名前を挙げても誰も知らなかった。」

忘れられた…か…
何で忘れんだよ…
何で忘れんだよ？

優翔「なあ…」

紫「何？」

優翔「俺ってそんなに、印象に残らないか？」

紫「えっ？」

優翔「俺ってそんなに、存在薄いか？」

紫「それは…」

優翔「俺ってそんなに！」

「要らない存在なのかよぉぉおおおーーー！！！」

「何で？何で！！何で忘れるんだ！！！友達ならともかく、俺の親まで何で？」

「何で忘れちまったんだぁぁぁあああーー！！！！」

「今までの生活は何だったんだよ！！！！」

「今までの思い出は何だったんだよ！！！！」

「今までの説教は何だったんだよ！！！！！」

「全部忘れちまったのか！！！？？？なあ！教えてくれよ！！！！！！」

「俺は一体何の為に産まれて来たんだ！！！！」

「俺は一体何の為に生きて来たんだ！！！！」

「忘れられる為かよ！！！！！ふざけんなぁ！！！！！！！」

「何がお前の為にだ！！！！！！

何がお前の将来の為にだ！！！！！！

全部忘れちまったら意味ねぇだろうが！！！！！！！！」

その時、空から雨がポツポツと降り、そして大雨になって降ってきた。

優翔「…うぅぅあああぁぁぁぁあああぁぁぁぁぁあああああああああああ！！！！！！！！！！」

「俺…存在する意味…無くしちまった……」

「死にたい…今すぐ死にたい！」

「殺してくれ！！！今の俺には何にも残っていない！！！頼む！！殺してくれ！！！」

紫「それはできない…」

優翔「何でだよ！！！俺に生き地獄をあじわえと！！？？俺は今すぐこの世から消えたい！！！頼む殺してくれ！！！」

紫「あなた死んじゃダメなの！！！」

「あなたは今日からこの幻想郷の住人として生きていく。心配しないで、家ならちゃんと用意あるから。」

優翔「くそっ…俺は…俺は一体！！！」

その日を境に、俺は心を殺せるようになった…

何の感情も抱かない。
喜びや…
怒りや…
哀しみや…
楽しみも…

感情の全てを殺せるようになった…

此処からが俺の…
忘れられし者としての…
物語…

続く

1話　忘れられた少年（後書き）

いかがでしたか？

感想を頂ければ嬉しいです。

次回は紹介ですね。

ではまた次回。

主人公の設定（前書き）

今回は主人公の設定を紹介します。
能力もここで決めますんで…

ではどうぞ。

主人公の設定

鳴神（なるかみ）　優翔（ゆうと）

１５歳の中学３年生
身長は１６９ｃｍ　と、意外と高め

能力

（忘れる程度の能力）
単純に忘れるだけで無く、相手の記憶をこの能力で消す。
例えば、
名前、能力、身体機能も忘れさせて、相手を確実に無能者にしてしまう。

（記憶する程度の能力）
消した記憶を埋める為、記憶を上書きする為など用途は様々。

相手や自分の脳に別の事を記憶させ、能力を無効化させる事が可能。
一度記憶した事を忘れずに居る事も可能。
また、技を憶えるのにも使える。

特徴

髪は短いが、差程短いとも言い難い髪の長さ。
色の明るい服が好き。
（黄、水色、白、オレンジ）

ルックスは中の上。

性格

明るく、親しみ易い性格
（本来なら…）

考えるより行動が先

心殺状態（こころごろし）

眼に光が無く、何の感情も表情も持たない。
だから殺す事に躊躇いを持たない。

常人では出せない速度が出せるようになり、力も巨大な岩をパンチ一発だけで砕く。

言葉が減る。

好きな物

カレー・ゲーム・友達・自由

嫌いな物
レモン・偉そうな奴　（特に変わった奴）・邪魔な奴・絶望

スペルカード

忘却「全知全忘」（ぜんちぜんぼう）
相手の記憶を消し去ると言う悲劇的なスペルカード。
自分が誰なのか、此処は何処なのか、と永遠に彷徨い続けてしまう。

忘力「忘却傷心撃」（ぼうきゃくしょうしんげき）
忘れられた心の痛みを力に変えて、極太エネルギー波として放つ。
心殺状態ならば、逆に激烈ラッシュとして相手にあびせる。

心殺「殺戮血祭」（さつりくけっさい）
心殺状態で使用可能。
相手に近づいた後、素手で滅多打ちにする。
近くに物があればそこに相手をぶつけ、壁となる物があれば押し付けて殴りまくる。
相手が死ぬまでこの行動をやめない。

殺符「撃滅崩壊弾」
心殺状態で使用可能。
宙に浮いた状態で両手にエネルギーを溜めて、両手から超巨大な気弾を放つ。

威力は幻想郷の3分の1を壊せる程。

滅殺「神鬼妖人破滅掌」
心殺状態で使用可能。
長い溜めと速い突きが特徴。
長く右手に力を溜めた後、その力をフルに解放し、真っ直ぐに掌底を繰り出す。

溜めた後の掌底は人から神までを必ず殺す。
それは溜めによる力と掌底が確実に相手の弱点を捉えているからだ。
しかも掌底の速さはコンマ何秒並みにに速く、普通ならば掌底を打たれた事にすら気づかない者も…

力を溜めている時に攻撃をすると、溜めをやめて相手の腹目掛けて掌底を打ち込み、気絶させる。

説明

元々は明るく、とても親しみ易い為、友達は多かった。
だが、忘却されたショックで喜怒哀楽のほとんどを見せなくなり、
‘‘心殺’’と言う特異な力を手に入れてしまった。
たまに明るい一面を見せるも、それは心を許した相手にしか見せない。
だが、彼はまだ心を強く持っていて、その心に‘‘正義’’を刻んでいた。
せめて、この世界の人に‘‘俺’’と言う存在をちゃんと憶えて欲

しい…

と…

東方キャラ

おまけとして霊夢と魔理沙と紫の設定も書きました。

博麗（はくれい）　霊夢（れいむ）

博麗神社の巫女を務めている。

歳は１４～１５

身長は１５０程

能力

（空を飛ぶ程度の能力）

空を飛ぶ以外に、

重力に逆らって飛ぶ

つまりは何にも縛られないと言う事。
全てに置いて平等な存在なのだ。

特徴

紅白の巫女服を着ているが、とても気になる腋出しが特徴。

性格

結構ドライな性格
お金が好き
困っている人が居たら放っては置けない性格だが、面倒見が良くない。

説明

彼女自身はかなり勘が良く、そのおかげで数々の異変を解決して来た。
だが、その分迷惑も数々…
力はかなり強く、幻想郷で最強ランクの実力を持つ。
だが、その力もこの後に起こる異変…
‘‘忘却異変’’では歯が立たなくなる。

霧雨（きりさめ）　魔理沙（まりさ）

白黒の魔法使い

歳は１４～１５

身長は１４０後半

能力

（魔法を使う程度の能力）

光や熱の魔法を操る。

物を破壊する威力が絶大。

特徴

白黒の服を着た普通の魔法使い

弾幕はパワーだぜ！

が代名詞。

性格

楽観的な性格

勝手に人の家に入り込み、物を盗んだりする。
意外に努力家

説明

霊夢と一緒に異変を解決して来た人物。
彼女はその気じゃないが、幻想郷の少女達を良く惹き付けている。
力では霊夢と同じくらい強い。
パワーが自慢の少女
だが、そんな彼女のパワーも今回起きる異変…
‘‘忘却異変’’では意味を成さない…

八雲（やくも）　紫（ゆかり）

スキマ妖怪、もしくは神隠しの主犯
歳は恐らく１０００年は生きていると思われる。
身長は１６０ｃｍ程

能力

（境界を操る程度の能力）
「境界」と呼べる物ならほとんどを支配下に置ける
空間の裂け目を作る事で、離れた場所同士をつなげてしまう。

特徴

日傘をさしていて、彼女自身とても胡散臭い
何手先も読んでいるような雰囲気をしている。

性格

おしとやかな性格
何処からでも現れる神出鬼没な妖怪

説明

彼女もまた、霊夢の異変解決を手伝って来た。
霊夢とは前は敵だったが、今は普通に話し合う仲。
幻想郷の七賢者の一人であり、最強の力を持っている。
だが、彼女の能力であるスキマも、今回起きる異変…
‘‘忘却異変’’では　無　と化す…

以上…

主人公の設定（後書き）

いや～…
結構下手な結果になっちゃいました…
ですので、時折編集を入れたいと思います。

ではまた次回。

2話　忘却異変（前書き）

忘れられた少年が起こした異変…

それは人々の記憶を消し去ってしまう異変…

それが…

‘‘忘却異変’’

2話　忘却異変

・・・

此処は…何処だ…？

気がついたら俺は…

高い山の上に居た…

服も何時の間にか和服になっている。
完璧な和服では無い。
洋と和が混ざったような服だ。

不思議な事に違和感無し…
この服に慣れていたのか？

後ろを向くと、時代劇でよく見かける古屋があった。

あの紫とか言う人が言っていた俺の家か…

だけど、真面目に考えれば、あの日から1日しか経っていない筈…

・・・

まさかな…

「気分はどう？」

ふと気づくと、後ろに紫さんが居た。

「あぁ…まあまあですね。」

「そう？なら良かった。」

「あの、あれって俺の家ですか？」

「そうよ。」

「そうですか…やっぱり、俺は…」

「…気を落とさないで。大丈夫、その内この幻想郷にも慣れるわよ。」

「はい。」

「じゃあね、また来るわ。」

そう言うと、紫さんは空間を裂いて、中に入って姿を消した。

「不思議だな…驚かないなんて…」

普通なら驚いて当たり前の光景を目の当たりにしても、驚かない…

俺の中の何かが変わったのか？

だけど…やっぱり…

「忘れたい…頭から付いて離れない…」

あの時の出来事が頭に強く刻まれた。

さっさと忘れて、楽になりたい…

‘‘せめて、忘れられる力があれば，，

そんな事を思った…

～紫　視点～

元気は無かったけど、大丈夫そうね、優翔。

・・・

何か変な気分。
少し人里に行こ…

私はスキマから上半身を出し、人里の様子を見た。

???

人里の様子がおかしい…
何かあったのかしら?

人里の様子を奇妙に思った私は、スキマを動かし、人里に降りた。

「一体何が…?」

すると、一人の人間が私に尋ねて来た。

「なあ、あんた…此処が何処か…知らねえか?」

「えっ?」

私は驚いた。

普段から人里(ここ)で暮らしている筈の人間が、ここを知らない?

おかしい…どう考えてもおかしい。

「ねぇ、そこのお人。此処が何処か、教えてくれないかい？」

一人、また一人と、どんどん私に聞いてくる。

これは…まさか…

異変？

私はすぐにその場から離れ、スキマに入って博麗神社まで移動した。

「霊夢！」

「？何よ？紫。そんなに慌ててどうしたの？」

「呑気にお茶をすすってる場合じゃないわよ！大変なの！」

「大変って、何が？」

「人里の人間の記憶が、全部無くなったのよ！」

「…何よ？それ？」

「百聞は一見に如かず、ついて来て！」
「わかった！」
私は霊夢を連れて人里まで移動した。
そして…
「な、何よ…これ…」
「みんな、自分が誰か、わからないの…」
霊夢は人里の人間が彷徨っている光景を目の当たりにし、しばらく動かなかった。
「どうする、霊夢…」
「…決まってるじゃない…」
「異変は、解決しなきゃ。」
霊夢は静かにそう言った。
今回のこの異変…
今までの異変なんか比べものにならない程、厄介になりそうね…
「よぅ…霊夢、紫。また異変なのか？」
突然、後ろから現れたのは白黒の魔法使い…

‘‘霧雨　魔理沙’’

「やっぱり、お前等もわかっていたか…」

「えぇ…だけど、何故私達には何にも起こらないのかしら？」

「恐らく、力の無い人間だけにしか効果が無いのかもしれない。」

「だとしても、犯人は誰なの？」

「…一人…検討が、つくわ。」

～優翔　視点～

今俺は山を下りて、人を捜している途中…

と言っても、こんな山奥じゃあ、人っこ一人居ないだろうけど…

でも、だんだんと人の声が聞こえて来てる。

人の住む地が近づいてる証拠だな。

よし、とっとと下ろう。

俺は急ぎ足で山を下った。

すると…

サワサワ…

草の音…誰か居るのか？

「お～い！誰か居るなら返事してくれ！」

そう叫ぶも、返ってくるのは草の音。

いや…考えてみれば此処は山奥…

人は居ない…

とすると…

「バゥ！！」

「マジかよ！！」

突然、猛獣が現れて、俺に襲い掛かって来た。

俺は抜けそうになった腰を抑えて全速力で走り出した。

必死に、必死になって俺は猛獣から逃げた。
猛獣も俺を食らおうと思いっ切り疾走して来る。
食うか食われるか　と言うのを聞くが、これは
逃げられるか逃げられないか…だろう。
いつもならとっくに尽きている筈のスタミナが、今起きている状況
の所為なのか、まだまだ余裕に走れる。
全く、幸運なのか不運なのかわからねぇな…
どこまで走って逃げられるか…
俺の運を試す！
「ついて来い！バケモノ！」
俺は後ろの猛獣に方向を向きながら挑発するように言った。
「バウ！！！」
猛獣はこの行動に対し、吠え、更に走る速度を上げる。
さて、ここからどこまで持つかな…
俺は有り余るスタミナ全てを全開にし、あの有名な陸上選手並みの
スピードを出して走り、猛獣を突き放す。
猛獣もそれに合わせて更に走るスピードを上げて来た。

その追いかけっこが1分程続いた。

…そろそろ…スタミナも切れそうだ…

マジでこのバケモノ、どんだけ体力あるんだ？

「バウ！！！」

くそ…まだ吠える余裕があるか！

何か方法は…

すると、俺の視線の先に岩があった。

岩…？

これだ！！！

「バケモノ！どうした！まだ追いつけないのか？このノロマ！！」

俺はバケモノを精一杯挑発した。

「グルルルルル…バウ！！！」

バケモノはまるで人の言葉が理解できるかの如く唸り、吠えた。

そうだ、それでいい…

このまま惹き付けて…

そして俺は足でブレーキを掛け、走るのをやめる。

バケモノは跳び、口を開け、俺は向かって来た。

「掛かったなマヌケ！」

俺はその瞬間その場から横っ飛びで離れ、バケモノはそのまま…

ズガッ！

顔面から岩に激突した。

へへへ、ざまぁねぇな。

俺は手で汚れを払い、その場から離れた。

ふと気づくと、何時の間にか、目の前に広がる景色は草原。空には雲一つ無い蒼天。

草原の先には森や村が見下ろせる。

「うわぁ～…」

あまりに盛大な景色に開いた口が塞がらない…

だが、そんな事もつかの間…

「グルルルルル…！！」

…マジかよ…ついてねぇ…

あの時に倒したんじゃ無いのか？

全く、呆れる生命力だぜ…

「もう、方法が無い…」

バケモノは俺に向かってゆっくり歩き、牙を口から見せる。

「バウ！！！」

バケモノは跳び上がり、口を開けて俺に突っ込んで来た。

くそ、もう此処までか…

すると…

ベシッ！

「キャン！！！」

突然バケモノの体に白黒の球が直撃する。

「キャヒーーン…」

バケモノは今の一撃で森の中へと帰って行った。

「…はぁ…助かった～…」

俺は白黒の球が飛んで来た方向を見る。

そこには…

「大丈夫？」

紅白の服、髪にはリボンをした少女。

「な、なんとか…」

「紫！この人？」

「えぇ。」

えっ？紫？何でまた…

「本当にこいつなのか？紫。」

「間違い無いわ。」

「えっ？ちょ、何の話をしているの？」

「・・・」

紫さんは黙り込むだけ…
その眼は非常に冷たい…

「何で睨む？」

「あなた…」
「今回の異変の犯人でしょ…？」

異変？どう言う事？意味がわからない…

「異変？何だよそれ？意味わかんねぇよ！」

「おいおい、自分から起こしておいて、白を切るのかよ。」
今度は白黒の服を着ていて、箒に乗っている少女。
「白？何の事かさっぱりだからだよ！」
「紫、ああ言っているけど、本当なの？」
「えぇ…」
「だそうだ、だから…」
「覚悟してもらうぜ。」
…はあ？覚悟するって…何を？
すると白黒の少女は何か物を取り出し、唱えた。
「恋符［マスタースパーク］！」
するとその　物　から極太レーザーが俺に向かって放たれた。
何だよ…何だよ…俺は何も……
俺は何もして…いない！！！

俺は眼を閉じ、ゆっくり開けた…
心を‘‘殺す’’ように…
すると…
「…殺符［撃滅崩壊弾］…」
俺は無意識的にそう言うと、両方の手にエネルギーを溜める。
そして、ある程度エネルギーを溜めたら…
「は…ッ！！！」
手を前に突き出すと、両手から超巨大な気弾が極太レーザーに向かって飛んで行く。
超巨大な気弾は極太レーザーを物ともせず、あっという間にレーザーを消し飛ばした。
「なっ？何だと？」
白黒の少女はすぐ超巨大気弾をギリギリで避けた。
「あぶねえ！紫！あいつにあんな力があるなんて聞いて無いぞ！」
「魔理沙のマスタースパークが破られたなんて…紫、どうなの？」

「…く…私もあれは…想定外よ…」

紫さんの想定外？それは多分、この俺の力の事だろう…

あの時バケモノから逃げてた時だってそうだ。危機から出る力じゃない…

元々全部、俺の力だったんだ…

だけど…今はそんな事関係無い…

今はただ……

目の前の敵を倒すだけ…

続く

2話　忘却異変（後書き）

何も知らない優翔は自分の防衛反応から

‘‘心殺’’を発動した…

心の痛みから放たれる力は…

ではまた次回。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2683z/

東方忘人記

2011年12月11日16時45分発行